

# 駿河台分室物語

【資料編】

対米謀略放送「目の丸アワー」の記録



のりぎね  
池田徳眞

チャールズ・F・ウィリアムズほか

名倉有一編



4. 大山勉 おおやま



図 22

生没年	1915?-1979?
出身	群馬県?
関連年譜	◇駿河台分室：警備担当。憲兵軍曹。協力を拒否した捕虜ウィリアムズを東京憲兵隊本部へ連行。 1933. 東京府立第四中学校 <sup>24</sup> 卒業。 35. 東京外国語学校 <sup>25</sup> 入学。 39.3.            "            フランス語学科卒業。 開戦後 <sup>ふついでん</sup> 仏印, ビルマ, 東京で勤務。[順不詳]
出典	<ul style="list-style-type: none"> <li>・城北会名簿. 昭和 50 年版.</li> <li>・       "       .       "       54       ".</li> <li>・東京外語会. 94 年版名簿.</li> <li>・東京外国語学校同級生からの編者宛書簡 [後述]</li> <li>・雨堤泉. 編者宛 E メール. 2008-10-15.</li> <li>・『日の丸アワー』 pp.29, 55, 74.</li> </ul>
写真 [部分]	提供：佐々木清一。 詳細：本書. p.30.図 23.参照.

<sup>24</sup> 現在の東京都立戸山高等学校. ["東京都立戸山高等学校". ウィキペディア. <http://ja.wikipedia.org/wiki/東京都立戸山高等学校>, (参照 2015-5-31)]

<sup>25</sup> 現在の東京外国語大学. ["東京外国語学校 (旧制)". ウィキペディア. [http://ja.wikipedia.org/wiki/東京外国語学校 \(旧制\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/東京外国語学校 (旧制)), (参照 2015-5-31)]

「また時には大山憲兵の部屋にいて、話し込むこともあった。彼の部屋をみると、これまた不思議である。フランス語の本がずらりと並んでいて、彼自身はゾラやモウパッサンの小説をフランス語で読んでいる。それは、私たちの憲兵というイメージとだいぶ違うので聞きただしてみると、彼の言うには「私は仏文卒で、フランス語の勉強を命じられているのです」とのことであった。」。『日の丸アワー』 p.74]

### (1) 戦前

#### 東京外国語学校：同級生からの書簡

○「私達のクラスは三十名足らずで、それが文科、法科、貿易科の三科に分れ、半数は貿易科が占めておりました。大山君は貿易科で私は法科でありました。

彼はすらりとした長身で眼の丸いのが印象に残っており又頭の回転も早く我々田舎出と違って洗練されており会話も流暢であったと記憶しております。」。

[佐々木清一. 編者宛書簡.1998-4-5, pp.1-2]

○「...背が一寸高く真面目な男で一生懸命勉強して居た様子。」。

[鈴木貞雄. 編者宛書簡. 1998-2-16, p.1]

○「私とは昭和 10 年から 14 年まで東京外語の仏語部で一緒でした<sup>26</sup>。旧制中学は当時名門校だった府立四中でしたから勉強はよく出来ました。時折改造社あたりから出版されたブハーリン、トロツキーなどの書籍を小脇にかかえていたのを覚えています。後年憲兵になった一恐らく志願したのでしょうか—ことを思い合せると異和感を覚えます。この種の本を持歩くのが、今風にいえばカッコよかったのかも・・・」。

[武博宜. 編者宛書簡. 1998-2-19, p.1]

<sup>26</sup> 「東京外語大は昭和 14 年当時、東京外国語学校と称し、キャンパスは皇居北側の濠端にある竹橋ノ近くの毎日新聞の社屋が建っている処にありました。」。

[武博宜. 編者宛書簡. 1998-3-24, p.1]

○「昭和14年卒のわれわれの仲間の就職先はまちまちで、貿易会社（三井物産、<sup>ごうしやう</sup>江商など）、銀行、新聞・通信社、<sup>こく</sup>國<sup>てつ</sup>〔国〕鉄、満鉄、満州國國策会社等です。大部分は入社後数カ月で<sup>おうしやう</sup>応召<sup>27</sup>になりました。

…仏語を学んだわれわれにとってパリがあこがれの都であった時代もありました。

世界的な戦争拡大、とくに日本軍の<sup>ふついにしんちゆう</sup>仏印進駐後、同じ戦地に行くなら言葉で國のお役にたちたいと考へ<sup>え</sup>仏印に送られた仲間も何人かいたはずです。

…大山君は恐らく志願して憲兵になったのだろうと書いたのは、なにも確証があつてのことではありません。学卒者の場合、<sup>よほど</sup>軍事教練を余程さぼらない限り、幹部候補生<sup>28</sup>の資格が与えられるので、入隊後はこの幹候のコースを進むのが普通でしょう。憲兵は軍隊内の警察という特殊な兵科ですから、通常のコースを進まずに憲兵になるというのは、そこに自分の意志が働〔原文は簡略字〕いたと考へるのが自然です。憲兵になるには堅固な思想・意志の確認、特殊な訓練が要求されます。学生時代に多少左翼思想に興味を<sup>いだ</sup>懐いたにしても、本物ではなかったのでしょう。」

[武博宜. 編者宛書簡. 1998-3-24, pp.1-2]

○「卒業当時は、まだあまりヨーロッパの戦争は気にならなかったように思います。私は貿易会社でモロッコやキプロスを担当していましたが、戦争が始まってからは商売ができなくて困った記憶があります。

…外語時代にはサイゴンの知識を持っている者はいなかったように思います。日本軍の<sup>しんちゆう</sup>仏印進駐は、戦争前のことですが大事件でした。フランスがドイツに降伏してビシー政府ができ、<sup>そうとく</sup>仏印ではドクー総督が表面上は日本に協力していましたが、思うようにはいかなかったようです。」 [木村寿栄吉. 編者宛書簡. 1998-4-2, p.1]

---

<sup>27</sup> 「召しに<sup>め</sup>応ずること。特に、在郷軍人が召集に応じて指定の地に参集すること。」  
[『広辞苑』]

<sup>28</sup> 「現役兵で、一定の資格を有し、予備役の将校または下士官となることを志望する者のうち、銓衡（せんこう）〔選考〕に合格した者。」 [同書]

○「この写真<sup>しゃしん</sup> [真] は昭和十年十月三日群馬県相馬ヶ原<sup>そうまがぼら</sup>という陸軍の演習場に軍事訓練のため野営<sup>やえい</sup><sup>29</sup>したときのものです。

我々が一年生のときのものです。

大山君は前列（坐っている）左から二人目、髪はのびていますが分けてはおりません。眼鏡<sup>めがね</sup>をかけあぐらで坐っております。右隣り裸体の男は金子君といいますが金子君の右二人目眼鏡<sup>めがね</sup>をかけ髪をきれいに分けているのが木村君です。木村君の後（一人中座している松岡君の後）に立って帽子をかぶっているのは武君、その右隣無帽で立っているのが私です。髪はざんばらです。武君、木村君は同じ貿易科でしたから<sup>30</sup> 詳しいお便りがありましたでしょう。」。[佐々木清一. 編者宛書簡. 1998-5-11, p.1]



図 23 東京外国語学校：軍事教練

撮影場所：群馬県相馬ヶ原の陸軍演習場。

〃 時期：1935.10.3.

提供：佐々木清一。

<sup>29</sup> 「①野外に陣営を設けること。また、その陣営。露營。「一地」②野外にテントなどを張って泊ること。」。『広辞苑』

<sup>30</sup> ○「...木村、大山、武は仏語部貿易科に属していました。」。

[武博宜. 編者宛書簡. 1998-3-24, p.1]

○「在学中、[大山]氏は文科、私は貿易科で親しい付き合いはありませんでした。」。

[木村寿栄吉. 編者宛書簡. 1998-2-24, p.1]

## (2) 戦時中

○「私は生え抜きのジャーナリストではありません。貿易会社にいたのですが、南方総軍の報道部に徴用<sup>31</sup>されて、開戦の日から一年間サイゴンで報道部員として情報部で働いていました。解除後同盟のサイゴン支局長に勧められて入社しましたので、入社したのは昭和十七年のことです。」[木村寿栄吉. 編者宛書簡.1998-4-2, p.1]

○「戦争中、私は同盟通信社に勤務して、仏領印度支那（現在のベトナム）のサイゴン（ホーチーミン市）にいました<sup>32</sup>。そのころ、大山君もサイゴンの憲兵隊に転勤になってサイゴンに来ました。

昭和十七年頃だったと思いますが、大山君に頼まれて、私の親しかった安南人（ベトナム人）を紹介したことがあります。たしかクンという名だったように覚えています。クン氏は米の仲買人（コンプラドール）でした。大山君は情報収集の仕事をしていたのではないかと思います。大山君は軟らかい話し方で、現地の人と付き合っていましたので、相手に信用されていたようです。

ある日、クン氏の家でお茶をご馳走になって話しこんでいるうちに、帰營の時間がせまり、慌ててクン氏に車で送ってもらったのですが、二、三分遅れてしまいました。その時、私達の目の前で、大山君が上官から、規律を守れと大声で叱責され、不動の姿勢で立っていた姿を覚えています。

戦争が終わって、帰国を待つ間のことですが、憲兵は国外の各地で拘束されるのではないかという不安があつて、大山君もサイゴンから離れる方がいいのではないかというような話がありました。これは、私が直接大山君と話したのか、あるいは、私たちの仲間の間で話しあったのか、私の記憶は定かではありません。

以上が、私のサイゴンでの大山君についての記憶です。」[同.1998-2-24, p.1]

<sup>31</sup> 「②国家権力により国民を強制的に動員し、一定の業務に従事させること。」  
[『広辞苑』]

<sup>32</sup> 「[仏印（サイゴン）駐在期間は] 昭和十六年十二月から二十一年五月まで」。  
[木村寿栄吉. 編者宛書簡. 1998-4-2. p.1]

○「[当時日本と仏印との間に] 民間機は飛んでいなかったと思います。東京新聞の記者をしていた外語の友人がサイゴンにきましたが、軍の飛行機を使っていました。十九年には船も危険で、仏印に来る船が遭難して、その船に乗っていて助かった友人が訪ねてきたこともありますし、終戦末期には同盟の知人が安房丸<sup>あわまる</sup><sup>33</sup>でしたかアメリカ承認の交換船で帰国の途中撃沈されて死亡した事件もありました。」

[木村寿栄吉. 編者宛書簡. 1998-4-2, p.1]

○「戦時中の昭和 17、18 年頃<sup>ごろ</sup>、当時私が勤務していた満鉄東京支社調査室<sup>34</sup>に私服で突然現れ、仏印サイゴンの新聞社の編集長だった某<sup>なにがし</sup>が日本に来ているはずだから、その居所<sup>いどころ</sup>を知りたいので調べてほしいというのです。その時始めて彼が憲兵となっていることを知りました。ビルマにも勤務していたはずです。」

[武博宜. 編者宛書簡. 1998-2-19, p.1]

○「...大山憲兵（曹長）は前記 [謀略を担当する参謀本部] 第四班に配属され小生<sup>しょうせい</sup>と一緒にありました。他に大高、小池両曹長<sup>そうちよう</sup>がおり、わが方工作員の保護・監視、敵国公口 [館?] 員の追跡に當<sup>あた</sup> [当] っていたわけです。」<sup>35</sup>

[谷山樹三郎<sup>36</sup>. 編者宛書簡. 1988-8-30, p.8]

---

<sup>33</sup> ○正しくは「阿波丸<sup>あわまる</sup>」。

○【阿波丸事件】太平洋戦争で連合国側から安全を保証されていた救恤（きゅうじゅつ）品輸送船の阿波丸が 1945 年 4 月 1 日台湾海峡で米潜水艦に撃沈され、2000 人以上が死亡した事件。米政府は違法性を認めたが、49 年日本は損害賠償請求権を放棄。『広辞苑』

○本書 DVD No.2. C-5.c.①参照。

<sup>34</sup> 「昭和 16 年頃の満鉄東京支社は地下鉄虎ノ門駅から少し溜池に寄った処にあり、戦時中に大東亜省が新設されるとこれに接收され、戦後の占領下にはアメリカ大使館の所有となりました。」 [武博宜. 編者宛書簡. 1998-3-24, p.1]

<sup>35</sup> ○谷山の参謀本部勤務期間は、おおよそ一九四一年 8 月～四四年 8 月。

○「敵国の公館員」が活動できたのは開戦までと思われる。

○したがって谷山と大山は、駿河台分室開設より約 2 年早い一九四一年 8 月から同年 12 月ころすでに「第四班」で一緒に仕事をしていたとも読める。

○但し、「第四班」という名称が使用されたのは、以下の記述によれば一九三七年 11 月以前か四三年 10 月以降。したがって、駿河台分室開設のころから両者は一緒に仕事をした可能性もある。

・「...参謀本部に於て秘密戦を担当していた第二部第四班は、昭和十二年十一月第八課（謀略課）に昇格し [以下略]」 [中野校友会編. 陸軍中野学校. 中野校友会, 1978, p.134]

・「...参謀本部第二部の機構も、昭和十八年十月には第八課は第四班に縮少され、二十年四月末には廃止された。」 [同書. p.143]

<sup>36</sup> 本書. p.64. 参照。



○「[一九四三年12月10日、ウィリアムズが協力を拒否した後、] 大山憲兵は、彼 [ウィリアムズ] を東側の建物の壁に向って顔がほとんど壁に付くようにし、手を後ろに組ませて立たせ、二時間ほどして東京憲兵隊本部に連行した。<sup>37)</sup>」  
[『日の丸アワー』 p.55]

### (3) 戦後

○「大山憲兵は戦後富士山麓<sup>さんろく</sup>の農民の先頭に立って、米軍の実弾射撃訓練に反対する行動を指導しているとの噂<sup>うわさ</sup>に接しておりましたが<sup>38)</sup>、現在の消息は承知致しません。」  
[谷山樹三郎. 編者宛書簡. 1988-8-30, p.8]

○「戦後、大山君に会ったのは、二十年ほど前でしょうか。東京の新宿でクラス会の会合があった時です。十人足らずの集りでしたが、大山君も元気に出席していました。昔とかかわらず物静かに話していたように記憶しています。」  
[木村寿栄吉. 編者宛書簡. 1998-2-24, p.1]

○「戦後私は昭和21年暮<sup>くれ</sup>満洲<sup>まんしゅう</sup>長<sup>ちやうしゆん</sup>春<sup>ひきあ</sup>から引揚げ、郷里<sup>きやうり</sup>で生活していた折、宇都宮在住の大山君から便り<sup>もら</sup>を貰いました。昭和25年夏以降私は東京に職を得、その後何回か大山君に会いましたが... [中略] 最後にクラス会(昭和50年頃<sup>ころ</sup>?)で会った時は体がすっかり不自由になり、気力も衰えていました。」  
[武博宜. 編者宛書簡. 1998-2-19, p.2]

---

<sup>37)</sup> 本書. p.137.参照.

<sup>38)</sup> ○東・北富士演習場に関する資料で「大山勉」の記録は見つからず.

[回答：山梨県立図書館. 2015-2-27, 静岡県立中央図書館. 2015-3-3]

○「戦後大山君が「反戦」、「反米」の立場をとっていたかどうかについては、全く心当たりがありません。彼との間にその種の話<sup>か</sup>を交<sup>わ</sup>はした記憶もありません。」

[武博宜. 編者宛書簡. 1998-3-24]



する がだいぶんしつものがたり しりょうへん  
駿河台分室物語 【資料編】  
たいいぼりやくほうそう ひ まる 「日の丸アワー」の記録

非売品

作成地：静岡県浜松市。

作成年：2015年。

増訂1版：2017年4月19日

増訂2版：2017年5月7日

増訂3版：2020年8月24日

著 者：池田徳眞。

チャールズ・F・ウィリアムズほか。

編 集：名倉有一。

翻 訳：名倉有一，名倉かずこ。

E-mail: nagura95@gmail.com

© 池田徳眞 1979.

© Charles F. Williams 1991.